



招局雜行

二

45  
652  
4



明僧5  
天  
石  
山



△ときくよ我またがひぬより中はあゝぬがま  
 似びしてこの糸足柄といへ七前がまたがひび  
 人といばう何の丸がよ似うけり五條がま  
 たがはびをといひあひひうり

釈迦の<sup>ま</sup>たりはうきあのうへ今ハたうらい  
 みろく

とあぐるお水どおぼるもお佛のお杖まぶ  
 けはぬる又<sup>十五</sup>乙前八十回と云一其病おろく  
 何あかかといふたはぬく一かり一にのいきて

又<sup>九</sup>或人  
 けりたう  
 大進延命  
 大進延命

魚らの事もなかなかにあはれなりといふことおぼ  
しき事とては程なく大いなる里にあらはれ  
川者たりしにちかく家を送りておぼやかり  
しはちりくに志の程をいふて見送らむす  
免みか記おこし程なくむらひておぼやかり  
にみししのはきちえんのるは法花經つ巻  
よきそきうとて此れ奇や記うむとおのふき  
いひあはれなりあはれといふきうなれん

儀法時ぐくハ薬師の誓をたのむ

一たび御名をきくくハ万の病をいふ  
二三及むりういふくせいのせし

○又丁丑乙前中一のばあふく二三教をう  
みそとくへあまししよせおとこのたつし  
くくたがえあふえあふさぐく己述よくある  
すてういふく世をうへるしそはちいと海  
あはれしよとめくあまししよのひまへま  
くのせて地しに神妙ありといふまきく  
次身を愛聞いふをの里より海を身をあり

もあはれらん我らの来世の佛ごとた  
り小波つるはふあはは

とまゝいひききりかたかむよたへずして  
あやのそ免法をなす袂二衣フタツギヌをとんごうりて  
きこえ

○又丁左廿六今柳とある人いりたりけり其  
よいそく

熊野の権現のあまの候ありあふ  
まのの浦ありあふ戸をいりて申けども

若王子

たまたまの資賢の二りりてあまの候ありあふまのの浦ありあふ

○又丁左廿七資賢はやいそく候ありに禮あり  
まの里たり今柳ありあふ只今柳ありあ  
かまの舞かたすむまはるる浦りて井  
多敷をらなりあふまのの浦あり

と詠川の佛の候ありあふ手は誓ひ  
たのまゝいひききりかたかむよたへずして  
花はなのまゝいひききりかたかむよたへずして  
かゝるへいそくを花くまふそく

○又廿丁の後に進今柳をいづらん

春のさだめの梅れさあろこむひらりて  
実なるその

資賢才三句成りて心ゆく

みた強し川の薄氷ふとけこるたぐひ

り柳

とうたはるる里小あひ免でしかまき敦家内  
裏まてあめく城まへのなる進れこかた水う  
つひまふとかくやありり藤と目持かん

トから里み地

松の木かぎま立よ進びあををれごうぞ  
まに〜あごもむ免がえがご〜に〜は進  
は春のささるそあまか〜

と志の奇世及をうりありり里そのちちたを  
大神歌をいづらん

あそまやある神こよあの〜ゆま〜のあ〜づ  
あそまよあがり〜免を神とむ〜人

か〜

その好足極望をあれさうざら二反園神  
滝水タキミヅ子伊地コイヂ古フル河カこまありき  
○又丁廿左資賢とよびてこれうたへといふり  
こゆりておしりなふさかむといへをすぢか  
くていす

次身交聞ひうばかまらるるあ花を  
もあゆむ境我らへ後世れ佛ぞとま  
かまきこいひまかあまが  
ぶこてこれにまのいひすまのあま

洗くるあとなくて二反をひりま記さ  
○又丁廿右此御歌をきあをたふとおほく見  
えゆてうち響きてゆへ

ら年のあをりしれをまらまあこのこ  
乃ちもちりはて  
はかのさうりよおひしおほま君のうらを  
むらておさせ給ふるなははちやあを  
あはらふふなりとちけりま

○又丁廿左清經痛よまづうひてかぎりなり

るり

ざうほふんどもていやくのちうひぢ  
とうひてまふは痛をやめさ

○又廿六右あてひと採らるる軍よあひて降  
終のきささみよ

今ささ心を極樂の

とうひて往生し

○古事談五の八幡臨時祭後式部大  
輔惟盛

サハナシ三四ノ句ハヨケレ共一ニノ句ヲ引替テ佛  
モ昔ハ凡夫也我等モ終ニ佛トウタフハニ令阻  
ラレタル所ヲ云ニヤ猶モ聞アカス今一度ト宣フ何  
度モ仰ニハトテ

君ガアゲコシ手枕ノ絶テ久成ニケリ何シニ  
隙ナクムツレケンナカラヘモセ又モノ故ニ

ト是ヲニ返ソ歌ヒタル入道又打領許此歌ハ侍  
從大納言帥中納言ノ娘ニ相具メ契アサカラザリ  
シニ何程モナクシテ別ツ歎ノ餘ニ作り出シテウ



タヒシ今様也ツレニハ我等カアケコシ手枕トコ  
ツ有ニ一ノ句ヲ引替テ君カアケコシ手枕ト歌フ  
事ハ入道カ所シ思ヒナヅラヘテウタフニヤツレヲ  
ハ祇王ハ如何ニトメ知タリケルゾ加様ノ事ハ時ニ取  
テ上手ナラテハ叶フマシアハレ祇王ハ今様ハ上手  
カ大上代ニモ聞及バズ末代ニモ有難トゾホメ給フ  
云々

○同卷實定上洛事の糸ハ平京ノ荒行更  
仰出メ共ニ御涙ニ咽バセ給ケリ角テ夜モイタ

ト柱返カ親カ運カ歌カトバカ皇カ座カ並カ台カ後カ我カ皇  
多カ家カ程カ一カ所カハカ皇カ御カ用カ道カ上カ也カ諸カ本カ丈カ傳カ習カ五カ  
心カ宗カ天カ皆カ感カ流カスカズカ涙カ被カ償カ分カルカ吟カ詩カ一カツカ歌  
フカタカル

佛七昔八九夫ナリ我等モ終ニハ佛也何レ  
モ佛性具セル身ヲ隔ルノミコソ悲シケレ

ト泣カ世カ下カ返カ歌カタリケレバ云々

○同卷額打論の糸ハ爰ニ興福寺ノ西金堂衆  
觀音坊勢至坊トテ聞エタル大惡僧二人アリ

ケリ、観音坊ハ黒糸威ノ腹巻ニ白柄ノ長刀ツキ  
短カニトリ勢至坊ハ胸黄威ノヨロヒキ黒漆ノ  
大太刀持テ二人ツト走延曆寺ノ額シ切テ落  
シ散々ニ打破リ

ウレシヤ水鳴ハ滝ノ水日ハ照共不絶

ト歌ヒハヤシツ、南都ノ衆徒ノ中へゾ入ニケル

云々

○同二の卷率都婆流の糸み丹波少将康頼  
入及ニ入ノ人々常ハ三所権現ノ御前ニ并リ

通夜スルヲリモ有ケリアル夜二人参リテ終夜今  
様ウタヒ舞ナドマヒテ曉方苦シサニ些打マドロミ  
タリツル夢ニ沖ヨリ白帆掛タル小舟一艘ミギハ  
へ漕ヨセ中ヨリ紅ノ袴キタリケル女房達ニ三十  
人漕ニアガリ鼓ヲ打聲ヲ譏テ

ヨロツノ佛ノ願ヨリモ千手ノ誓ゾタノモシキ拈

タル草木モ忽ニ花サキ實ナルトコソキケル

ト推返々々三返歌ヒ澄シテ搔消ヤウニゾ失ニケ  
ル云々

七丁

○同五の卷月見の糸は徳大寺左大将實定卿  
此女房ヲ喚出テ昔今ノ物語共シ給ヒテ後小夜  
モ漸深行バ舊都ノ荒行ス今様ニコソ被歌ケレ  
舊高キ都ス來テ見レバ淺茅ガ原トゾ荒ニケル  
月ノ光ハ隈ナクテ秋風ノミゾ身ニハ入

ト推返々々三返歌ヒ澄サレタリケレバ云々

○同六の卷喘涸聲の糸は淑春大納言資方卿  
モ其日同少院參セラレ法皇殿覽有テ如何ニヤ  
如何ニ此比ハ習又都ノ住居シテ郎曲ナドモ今ハ定

三返  
二返  
一返  
ト云  
ト云  
ト云

べきんぬ〜〜〜  
罪業を〜〜〜  
阿弥陀佛

○義経記 五の卷 七丁右 志保の吉野は捨らる糸  
静法樂のさの苦〜のるあり 我をえあり  
〜のよもあ〜と思ひけねば物まおほく  
〜ひあり〜うけきもふて白松子の上手  
〜ありけき〜音曲もうつ里ふも〜ばん及  
〜びま〜人涙をなが〜神を志保〜ぬいな  
〜や〜をほりよの〜ぞう〜ひける

言物語六の巻を命大御  
りしき...  
まき...  
や...  
石...  
と...  
と...  
と...

ありのほさびのあしきづるあつきの路の  
恋しきよあかでも形きつあまのげを  
いつのせまうのほろぶきまのれの海よあ  
しき一祝のあま子れあまはなれてはふ  
か...  
○同書七巻母の御事物語の御事...  
その盃母よりあげて三年あけのりるくご  
今も...たる志る...まば杯おのいどりあま  
おやと志る...杯さほの必着のさあなるぞ

當時鎌倉よりて秩父の六郎が今柳橋原  
源太が横笛とさくさくも他人なれば  
一交もせらればこそまのの宮根あ  
時節の上手とさく...なりとほせびのまひ  
つ...十郎...あぶえとり...平調  
よ音取いのみくおそ...とせめけせむあ  
辞退よ及ひけると十郎...たて...あけ  
まのあ市...ひ...ひて...  
けれ

しづとをこまてうちのづも 社よあま  
こまてみぢねを かしこくあまの宮

と二へんやあそをみりしる言

○同八の巻祐経が屋形へけり糸また妻つ耐  
い神なすぬまのかけりさいひしをふまかく  
るとい愛りしあふびして十郎どの杯いりま  
けりこまのぬ 雨前くもあまのまー海をぞ  
者もちあふとおぼえり今扱とくひいり

といひけむバ二人の君扇拍子をおちがし

蓬萊山よのふ年ある子秋万歳かきおの  
里松の枝よの鶴築くひいそ母のうへ  
亀あそぶ

といふつせいをや二へんあでこまこひし  
れき又祐成子細よ及ぶばしてもちし  
さつといひて

君がほむの免のをの山のたきつぬ  
といふつせいをあがておぼへ舞けるのちよ

君の代い子代よつとびなる塵のあつち  
かふる山とたふるあで

とおしつらしつとびんかみてぞあつちなる  
まのまいつらしつとびん

このつらしつとびんかみてぞあつちなる  
あやのこしつとびん

このつらしつとびんかみてぞあつちなる  
あやのこしつとびん

い神なつぬまのかけしつとびんかみてぞあつちなる  
あやのこしつとびん

者もちあふとあばえつら今扱とつとびん

といひけむべ二人の君扇拍子をおながり  
蓬莱山よのち年ある子秋万歳かきおむ  
里松の枝よの糖菓らひいそ母のうへい  
亀あそぶ

といふつせいをあつちつとびんかみてぞあつちなる  
あやのこしつとびん

君がほむの免のまの山のたきつとびん  
といふつせいをあつちつとびんかみてぞあつちなる







いよるハ一とやせんかくやせんと思ひ

重知彦永貞霊神世に波志の徳永

印乃采地乃武蔵国崎玉郡藤津里

長長治負行豊受姫塩安姫二

松神社造文政九年九月十八日

永貞乃家臣田中幸成神職内野道江

守守其里知平下駒其神社奉

書穀大明神奉新良志

